

発刊にあたって

医学研究院長・医学部長

中谷 晴昭



千葉大学医学部は2009年に創立135周年を迎えました。それに先立ち、記念誌の刊行が発案されたのは、今から6年ほど前、徳久剛史先生が医学研究院長・医学部長を務められていた2006年の早春に遡ります。約50年前、千葉大学医学部の85周年記念事業として、記念講堂の建設、85年史の刊行が行われました。今回、めのはな同窓会の渡辺武前会長、伊藤晴夫現会長のご尽力により、2007年、新たに135周年記念事業会が発足し、老朽化した同窓会館の新築とこの記念誌の発刊が決定されました。新しい同窓会館は図書館亥鼻分館の傍に建築が始まろうとしていますが、その完成より一足先にこの千葉大学医学部135周年記念誌が発刊に至りました。

千葉大学医学部ではこれまでも85年史と100周年記念誌が発行されています。この過去10年間で千葉大学医学部を取り巻く環境は大きく変わり、一段と厳しい状況になりつつあります。2004年の国立大学法人化以来、毎年、国からの運営費交付金が減額され、教員数も毎年減員される状況になっています。また、同年から開始された卒業後の臨床研修必修化によって、卒業生の大学離れ、地域医療の崩壊が加速しました。そのため、医師不足に対応して医学部入学者定員が増員となり、2011年現在、千葉大学医学部の学生定員は120名に達しております。結果的に、学生定員が増加したにもかかわらず、教員数が減少するという極めて矛盾した状況を招いております。臨床系教員も、法人化以降附属病院の経営的な配慮もあり、診療に忙殺されることが多く、研究時間の減少も懸念されています。全国的にも研究医が減少し、国際的に見ても日本発の医学研究論文が減少しつつあることが指摘されており、日本の医学・医療の将来が危惧される状況です。加えて、2011年3月11日の東日本大震災は甚大な被害をもたらし、日本にあらゆる面で大打撃を与えて大学や医学・医療にも間接的に影響を及ぼしております。

しかしながら、どのような状況下であっても「人類の健康と福祉に貢献すると共に次世代を担う有能な医療人・研究者を育成し、疾病の克服と生命現象の解明に向けて挑戦を続ける」という我々の使命が変わることはありません。千葉大学医学部85年史、100周年記念誌を経て135周年記念誌に亘る長い歴史をたどる時、本学の諸先輩方は第二次世界大戦をはじめとした極めて困難な時代にも、敢然とその使命を果たし、多くの優れた臨床家や研究者を輩出してきたことを窺うことができます。このことは、千葉大学医学部に教職員として籍を置く我々が、どのような状況下にあっても、その伝統を受け継ぎ、たゆまない努力をして、一步一步その目標に進むことの重要性を再認識させてくれるものです。過去を振り返り、千葉大学医学部の将来のさらなる発展への道筋を探るためにもこの135周年記念誌の発刊は極めて意義深いものと思われま。

最後に本誌の編纂にあたり、お忙しい中ご寄稿下さった諸先輩、教職員等の皆様方そして作業に当たられた方々のご努力に深く感謝致します。